

VI. エチオピア帰国後の報告

● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 加藤 千智

「視野を広げたい！自分に何ができるかを知りたい！」という2つの理由がこの研修に参加した大きな目的だった。この研修に参加して、ポジティブに考えること、多面的・多角的に考えることの大切さを学ぶ事ができた。今後は、自分の思いだけでなく、相手の立場に立って考えることができるように、色々な視点から物事を捉える力を身につけていきたい。今回の研修に対する目的の達成度はとても高い。実際に自分の目で見て、感じて、現地に行ったからこそ学ぶことがたくさんあった。今回のエチオピアでの研修を通して自分に何ができるかを考えた時、自分が感じたエチオピアについてそのままを伝えることだと思う。クラスでは、エチオピアに対して「途上国」「何もない」「かわいそう」というイメージをもっている児童が多い。しかし、「I'm happy!」と笑顔で答えた彼らはかわいそうな存在ではない。クラスの子もたちに世界には色々な文化や背景をもつ国があり、相手を尊重して考えることがすごく大切なことであること、それは自分たちの身近でも同じ事が言えることを伝えていきたい。

● 木下 恵

この研修に参加した目的は、開発途上国の現状を五感で感じ、そこでの体験を通して、その国の素晴らしさや、支援のあり方、抱える課題などを、自分の言葉で子ども達に伝えられるようにすることである。現地では、普段の食事、町や村の空気、安全な水のありがたさ、人々の表情など、実際に行かないと感じられないことばかりが、次々と五感を刺激し、全てが教材になりえるものであった。また、訪問先では、そこで出会う青年海外協力隊や専門家の方々の貴重なお話を伺うことができ、支援のあり方について改めて考えさせられた。そして、現地の人々との出会いを通して、1対1で人と向き合い、互いを尊重することの大切さを強く感じる事ができた。研修を終えて、今、自分が期待する以上のものを得られたと思う。また、それを自分の中できちんと整理し、自分の思いとともに、子ども達に伝えていきたい。

● 近藤 勝士

この現地研修に参加して、自分の考え方や価値観に変化が生まれた。参加する前は、開発途上国には先進国である私たちが支援してあげなければという思いが心の中にあった。しかし、エチオピアの人々、活躍する日本人の方々との出会い

や数々の研修を通して、支援するのではなく、お互いに課題や改善点があり、共に考え乗り越えていくのだという考え方が変わった。物質的には確かに先進国である日本の方が豊かである。しかし、心の豊かさはどうかというと、エチオピアの人々の方が豊かかもしれない。どんな状況であろうと、それぞれに課題や改善点があることを改めて感じた。私は、日本で日々接している目の前の子もたちの成長を促すきっかけをつかみたいという思いでこの研修に参加した。自分が見たこと、感じたこと、経験したことを通して、子どもたちの成長を促す題材を数多く手に入れることができた。今後の教育活動において、最大限活用していきたい。

● 佐藤 仁美

私の現地研修の目的は2つあった。1つ目は、エチオピアのいいところと日本との共通点をたくさん見つけてくること。2つ目は、国際協力の現場を直接見て学び、価値観を広げることであった。実際に現地の人々と話をする中で、年配者を敬う文化など日本との共通点が思っていた以上にたくさん見つかった。こちらが心を開いて話をすれば、向こうもすぐに心を開いてくれたことが嬉しかった。また、青年海外協力隊や専門家の方々と交流をする機会が多くあり、本当に必要な支援とは何かについて、何度も考え、現場で働く方々と意見交換ができたことは素晴らしい経験になった。日本の子どもたちには、国・人種・宗教などが違っていても、みんな同じ人間で、お互いに尊重し合い助け合う必要があることを伝えていきたい。また、メディアからの情報だけに惑わされず、自分の目で見ようとしていたり、調べ考えたりする力を育てられるような授業をしていきたいと思う。

● 鈴木 翔大

教師海外研修に参加した目的は、授業を行う上での自らの引き出しの数を増やすことであった。現地に行くことによって「授業のネタ」という名の引き出しは増やすことができたと感じている。これまで、自分の中の知識量としては教科書や本の中に書いてあることを伝えることしかできなかったが、現地に10日間ほど身を置き、五感をフルに活用して体験することで、これまで文章に記された数行分の知識に加え、生の体験談や現地にあった実物など絶好の材料を集めることができた。ただ、達成度という観点で考えると、ある程度の部分までは達成できたが、もっと様々なものを集めることができたのではないかと思う。具体的には、もっと人との関わりを大切にしておけばよかったと感じている。せっかく言葉を

駆使することができるのに、なかなか現地の人と関わりに行くことが出来なかったため、その部分を満足にできればさらによかったと思う。

● 松田 真紀

見る・聞く・味わう・匂う・触るなど、五感で体験したことをどう教材化するかを考えてデータを振り返ってみたが、写真や動画の多さに驚かされる。自分だけでなく、中間のフィルターを通して見た世界にも新しい発見があった。英語力が乏しく、現地の言葉も全くわからない私にとっては、言葉の壁が高く、インタビューもアンケートもチームの協力を得て、情報を共有できたことを嬉しく思う。膨大なデータの中から何を選択し、どんな発問につなげれば生徒達の学びが深まるのか、今の段階ではまだ整理がついていない。衣食住を初めとする生活文化を入り口として、エチオピアと日本の違いや共通点、価値観や生き方の多様性、学校や子どもに関すること、支援の在り方や幸せのかたちについて生徒と共に考えたい。そして、遠く離れていてもイメージする力、思いを馳せることの大切さを伝え、日々の生活の中で身近な人と向き合うことが、国際理解のスタート地点なのだ気付かせたい。誰にでも、どこにいても、できるのだと私自身が気付けたことも成果の1つである。

● 油科 里佳

私が研修に参加した目的は2つある。1つ目は途上国を五感で感じることだ。授業で諸課題を生徒が現実味をもって話を聞けるかが、生徒が課題を主体的に考えることに繋がると考える。だから、私が感じたままの姿を生徒に伝えたいと考えた。実際に現地に行き、私は本やネットでは得られない知識を得ることができた。特に現地の人たちの声や笑顔を直接見ることができたことは、生徒に伝える上で大きな鍵になると考える。2つ目は私がアクションを起こすことで、生徒に積極的に参加することの大切さに気づいてほしかったからだ。ST (ショートタイム) などで実際に見ることや参加することでわかることがたくさんあることを、私の体験を踏まえて伝えることができると考える。

● 吉田 麻里子

私は社会科の教員として、中学校で「アフリカ」や「国際協力」などについて教えている。その中で、教科書や資料集、インターネットに載っている情報だけでなく、実際に自分の目で見て確かめた「本物のアフリカ」を生徒たちに伝えたいという思いが芽生え、今回の研修への参加を決意した。また、自分自身も「国際協力」という点において、自分ができることは何か、子どもたちに対して何ができるのかを知りたいというもう一つの目的もあった。一つ目の目的については、事前研修でテーマごとにどんな教材をどのように集めるかということ整理して出発できたこともあり、多くの写真や動画、インタビュー映像などを持ち帰ることができた。二つ目の目的については、開発途上国の援助の形には様々あり、自分ができることも多くあると感じた。何よりも自分が、自分の目で途上国の現状を見たり聞いたりする中で、疑問をもった

りいろいろな角度でものを考えたりすることができるようになったことが大きな収穫である。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 加藤 千智

教師海外研修に応募しようと決めた時、エチオピアに対するイメージはほとんどなかった。研修に参加するうちに、エチオピアはコーヒーとマラソンが有名なことを知った。インターネットや本で調べてもエチオピアに関する情報は少なく、どんな国なのかどんな生活をしているのか等、具体的なイメージを持つことは難しかった。実際にエチオピアを訪れて、「エチオピアは遠い!」と思っていたが、実際に訪れると「思っていたより近い!」というのが第一印象だった。「意外に近い」と思えたことで、これまで遠い存在だったエチオピアやアフリカが身近に感じられた。赤土が広がり、自給自足の生活をしているかと思っていたが、近代的な建物も多く、整備された道路に自動車が走っていた。道路を走っている車の多くは、TOYOTA の車だった。日本とエチオピアは全然違う国だと思っていたが、似ているところがたくさんあると思えたことが肯定的な出会いの第一歩だったように思う。

● 木下 恵

エチオピアはアフリカの長い歴史の中でも、最古の独立国と言われており、それゆえ、独自の文化が既存する貴重でユニークな国である。ゲエズ文字といわれるエチオピア独自の文字、民族や地方によって異なるたくさんの言語、インジェラというクレープのような独特な主食、どれをとっても日本にはないものであり、知れば知るほどおもしろい。しかし、年上を敬ったり、人をもてなしたりする文化は日本と共通するものがあり、親しみを覚える。また、青年海外協力隊の方々と現地の方々との間に生まれた信頼関係により、日本人を歓迎してくれる雰囲気は、私たちを勇気づけてくれた。エチオピアのユニークな文化や現地の方々との温かいふれ合いを通して、エチオピアという国に親しみをを感じるようになったことは、まさに肯定的な出会いだと思ふ。また、それは特に帰国してから強く感じるようになった。オリンピックでエチオピアの選手がテレビに出ると応援したくなり、エチオピアに関するニュースにも敏感になった。離れていても気になる国

になったことは間違いない。

● 近藤 勝士

「日本人に似ているエチオピア人」こう感じる事ができたということは、エチオピアに肯定的に出会う事ができたと思う。事前に書籍やインターネットで調べた情報で、お辞儀する文化があり、コーヒーセレモニーなどのおもてなしの文化があり、目上の人を敬う文化もあるということを知った。そして、実際にエチオピアに行き、人々と接したり、街の様子を見たり、いろいろな話を聞いたりしていくことで、日本人に似てシャイな人が多いこと、遠まわしな表現が好きなことなどの共通点も見つかった。また、エチオピア人は、時間にルーズでアバウト、約束は反故されるのが当たり前という青年海外協力隊の方々のお話を伺った。研修の中でもそうした場面が実際に見られた。一見、良くないところに思えるが、それは仕事よりも家族や友達を大切に考えるという考え方を持っているからだという話を聞き、肯定的に捉えることができた。どんな事柄も、肯定的に捉えようとする気持ちが大切であることを改めて実感した。

● 佐藤 仁美

この研修で、エチオピア人は正直で優しい人が多い、教育が大切だと思っている人が多い、自分の国や文化を好きな人が多い、自分は幸せだと思っている人が多い、治安が良いなど、エチオピアのいいところがたくさん見つかった。また、エチオピアでは、家族やお客さんと一緒に食事をするときには相手の好きな具をインジェラに巻き、手で食べさせるグルンシャという食べ物を分け合う文化があり、素敵だなと思った。エチオピアの小学校の就学率は93%（女子でも90%）と、意外と高いことに驚いた。これはアフリカの他の国の平均よりも高い数値だ。しかし、そのうち60%の子どもたちは、小学校を卒業するまでに中退してしまい、中学校の就学率はたったの39%と、エチオピアの教育の課題も分かった。エチオピアの子どもたちはいろんな背景を抱えているが、私たちが学校に訪問したときは、歌や声援でもてなし、愛らしい笑顔で温かく迎えてくれたので、子どもたちの生きるエネルギーを感じた。

● 鈴木 翔大

初めてのアフリカへの訪問だった。訪問前にもっていた印象は「不便」「何もない」など率直に言うとネガティブな偏見だらけの考えばかりであった。しかし訪れてみてわかったことは、そんなものは一部のことであってそれだけですべてを判断するのは間違いであるということである。現地では、実際にいい思いをたくさんしてきた。まずは気候の良さである。雨季ということで雨は多かったものの、気温が高すぎず酷暑の日本から来たことを考えると過ごしやすい気候であった。人々との関わりについても、みんな人懐っこく我々に興味津々であった。どこへ行ってもスターが来訪しているのかと見間違えるほどの人ばかりで、我々のことを出待ちしている方々もいたほどであった。食事に関して、主食のインジェラはおいしかった。人それぞれ好みは違うかもしれないが「ワ

ット」と呼ばれるおかずの味を引き立ててくれて、インジェラがエチオピア料理を楽しませてくれた。これらの経験が私を魅了していった。

● 松田 真紀

どんな食べ物でもチャレンジしてきた私にとって「腐ったぞうきん」と表現されたインジェラという食べ物の味は想像がつかなかった。イタリアに侵略された過去があるものの、植民地にされることなく自国を守り通したエチオピアには独自の文化が根付いており、とても興味深い国だ。誇り高い食べ物の酸っぱさに最初は驚いたが、出逢う日本人が全員「そのうち慣れて美味しくなる」というのを聞き、周りの人から肯定的に出逢わせてもらったなと感じている。特に、青年海外協力隊の小山さんが「嫌いだったのに、今ではすべてが愛おしい」と言ったのが忘れられない。食べ物だけでなく、人も、場所も、景色も、動物も、共通点や、違い、何もかもを受け入れたからこそ得られた感情なのだと思う。嫌いなところですら愛おしく思えるのは、小山さんがそれ以上の何かをエチオピアから得て学んでいるからだと思える。人生をかけて走っている彼らの陸上に対する熱い思いに、心揺さぶられたからだと思う。「最近ゴミをゴミ箱に捨ててくれるようになって嬉しい」と言った笑顔がステキだった。

● 油科 里佳

私が学んだことは、いろいろな角度からその国を見てみないと何も分からない、ということだ。私たちはしばしば目の前にある情報だけに頼ったり、第一印象で物事を判断しがちである。私もその1人だった。エチオピアに到着した時、日本とは違う当たり前に驚くことが多かった。私とエチオピアの出会いには肯定的とは言えなかった。しかし、エチオピアでたくさんの人と出会い話をしたり、街をたくさん歩いたりする中で、その国の特徴、他にはない良さが見えてきた。私が思うエチオピアの良さは、その人柄にあると思う。彼らはとても誠実でお世話好きで人懐こい。そして、自分の国に誇りを持っている。また、あるものを工夫して使い、ものを大切にしているように見えた。確かに、エチオピアにはまだまだ改善の余地がある部分もあるだろう。しかしこの国らしさ、良さを忘れずにいてほしいなと思った。

● 吉田 麻里子

渡航前は、デモが起こっているという社会的情勢や自分と異なる褐色の肌の人たち、主食の「インジェラ」への不安など、エチオピアに対し決して肯定的な印象をもっていたとは言えなかった。しかし、実際に自分の足でエチオピアの地を歩き、そこに暮らす人を知れば知るほどエチオピアを訪れる前に抱いていた否定的なイメージは薄れていった。無表情で立っていた知らない人でも「サラムノー」と挨拶するとニコリと笑って「サラムノー」と返してくれるあたたかさ。「コーヒーセレモニー」で客をもてなすという、日本の「おもてなし」にも通じるもの。学校訪問や街中で出会った子どもたちの人懐っこい笑顔。一方、現地ではエチオピアの抱える多くの問題や課題にも直面した。しかし、事前に調べた情報やそ

の地で経験したことなどを合わせてその課題について、多面的・多角的に考えてみるとより肯定的にエチオピアを捉えることができるようになった。そして、人々との交流により、エチオピアをより身近に感じられるようになった。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 加藤 千智

青年海外協力隊や専門家の活動、カイゼンの取り組みや給水設備など多くの日本をエチオピアで見ることができた。道路を走っている車はほとんどがTOYOTAの車だった。エチオピアでこれほど多くの「日本」を見ることができるとは思っていなかったので、すごく驚いた。また、現地の小学校の校舎の壁には、世界地図や元素記号の表があり、日本の学校でも見覚えのあるものがたくさんあった。日本でもエチオピアでも同じような内容を学習していることを知り、親近感をもつことができた。また、学校を案内してくれた先生の「I'm proud of my work, as a teacher」という一言がとても印象に残った。エチオピアでも誇りをもって先生という仕事に向き合っている人がいることを知り、とても嬉しかった。何より、これから自分が胸を張ってそう言えるように仕事と向き合っていきたいと強く感じた。

● 木下 恵

エチオピアには日本に関係するものが結構ある。アディスアベバの道路にはTOYOTAと書かれた車がたくさん走っている。また、東芝やブリジストンなど日本のメーカーもあり、日本製の製品は信頼されていてとても人気であると現地の方から伺った。中でも驚いたのは「JICA」という言葉を知っている人が意外と多いということである。日本人ですらJICAを知らない人が少なくないのに、エチオピアの町や村で現地の方々に「JICA」と声を掛けられたことに衝撃を受けた。これは、青年海外協力隊や専門家の方々による地域密着型の支援が着実に浸透している証拠ではないかと思う。日本に対するイメージが良いのも、支援の形が現地の方々に受け入れられているからであると感じた。また、相手のために時間をかけてコーヒーセレモニーを行うエチオピア人と、日本人との共通文化であるおもてなしの心は、それ自身が、互いの理解を深め合うための大きな共通点であると言える。

● 近藤 勝士

今回の研修で多くの日本人がエチオピアにおいて活躍していることを知り、日本とのつながりを感じる事ができた。現在、エチオピアでは過去10年連続で、毎年約10%の経済成長を続けている。その背景には、中国の経済的な支援が大きい。日本もJICAの支援を中心に、人を育てるという視点で草の根の支援を続けている。エチオピアカイゼン機構(EKI)のマッコネン副所長からは、日本の「カイゼン」という言葉がエチオピア政府や企業の中にも浸透しており、幼児教育から大学教育までのカイゼンを意識したカリキュラムの作成中であるというお話をお伺いした。今日よりも明日へとという考え方や気持ちを育てようとしているというお話に感銘を受けた。また、いくつかの学校を訪問させていただいて共通して感じたことは、子どもたちの素直さ、好奇心、人懐っこさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさは世界共通だということである。やはり、世界を支え、変えていくのは教育だと感じた。

● 佐藤 仁美

エチオピアには、日本と同様、おもてなしの文化や年配者を敬う文化があり、国民は誠実でシャイな人が多く、控え目で遠回しに物事を言うところなど、意外と共通点がたくさんあった。恋愛の話がとても盛り上がる場所など、共通点を発見する度に、エチオピアという国が一気に身近に感じられた。支援には様々な形があるのだということも学んだ。例えば、道路や電車などのインフラ整備など成果が形となって見えやすい支援と、村落に溶け込んだ技術協力や教育支援など成果が見えにくい支援。どちらの方が正しいということはなく、どちらのやり方も必要だと感じた。また、その際に、相手と対等な立場で話し、相手のニーズに応えることがとても大切だということもわかった。また、支援終了後に、自立につながるのか、10年後や20年後のこともよく考えてから支援内容を決めることが重要だと学んだ。

● 鈴木 翔大

日本とエチオピアは、それぞれ別々の地域にあり、互いの距離も飛行機で丸一日かかるほど離れている中で、お互いのつながりや共通点も多々見られた。私が最も感銘を受けている取り組みが、カイゼンの取り組みである。「無駄を省く」という考えのもと「整理、整頓、清掃、清潔、躰」の頭文字をとった5Sの実践に取り組んでいるが、大人に対してこの考え方が思うように浸透していないが、子どもに浸透させるために学校教育のカリキュラムに取り入れているようである。新しいものを取り入れず、伝統的な考え方を大切にするという意味では日本との共通点を感じた。また、街中にはトヨタ車が多く走っており、人々の中には「日本」を知らないが「トヨタ」は知っているという人もいるくらい生活に密着している。これだけでも繋がりをを感じるが、カイゼンを取り入れることで有名なトヨタである。カイゼンを通して、日本とエチオピアの強い繋がりを感じた。

● 松田 真紀

どこの国でも、子ども達の笑顔はキラキラしていて宝物だということ。先生の子どもを思う気持ちや学びを深めたいという熱い思いは共通するという。この2点は学校現場を訪問する度に強く感じた。日本が鎖国していたように、他国からの文化の流入を必ずしもよしとはせず自国の文化に誇りを持っていることは、今はなきかつての日本の姿にも思える。また、エチオピアの人々は日本人とよく似ている点もある。例えば、丁寧な挨拶、遠回しなものの表現、大人しくても静かで真面目、おもてなし精神（茶道のようなコーヒーセレモニー）、席の譲り合い、発言するときの小さめで控えめな声。戦後の日本を思わせるような、平屋のトタン屋根、水洗ではないポットン便所、上下水の整備不足、あちこちが穴あきの服、裸足の子ども達。70年経ったら、今の日本のようになるのだろうか？もっと外貨を獲得し、輸出輸入が活発になるのだろうか？と想像がふくらむ。

● 油科 里佳

私が一番繋がりを感じたのは、JICAのコーヒー農家支援において。エチオピアに行き、森林で働きながらコーヒーを見守る人、その技術支援や販売システムの構築をサポートするスタッフなど、様々な人の手を通じて私たちのもとに届いていることを、身をもって体感した。日本に帰ってきて数日経つが、コーヒーを見る度に一人ひとりの顔が思い出される。そして、今まで贅沢ができなかったエチオピアのコーヒー農家の人たちの豊かになった生活を思い出す。コーヒーを大切に飲みたいと思うし、もっとたくさん飲みたいと思う。私にとってとても思い入れのあるものになった。エチオピアにある価値ある商品を、日本が発掘しエチオピアの発展の糸口を見つけ、達成している。遠く離れていても、エチオピアと日本の繋がりを感じた瞬間だった。

● 吉田 麻里子

遠いアフリカの国であるエチオピアに日本とのつながりなんてあるのかと思っていたが、今回の研修でたくさんつながりを見つけた。物質的なつながりと言うと、街を走る車は「TOYOTA」ばかり。実際に現地の人と話しても日本といえばTOYOTAの名前を挙げる人が多かった。精神的な面では、JICA エチオピア事務所の神所長から、「日本とエチオピアは似ている」との話がうかがった。植民地支配を一度もされていないという歴史的背景から、民族や文化に対する誇りや自分たちの価値観を重視するとのことだった。実際に、現地の人と関わる中でそのようなことを感じる機会が多々あった。また、青年海外協力隊の方々の活動やエチオピアの企業や学校現場への日本のKAIZENの普及などにも日本とのつながりを感じた。どちらも、押し付けるのではなく、相手の国を重んじながら、そのニーズに応えていくことがとても大切であると感じた。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 加藤 千智

エチオピアと日本の共通の課題は「すべての子どもが安心して笑顔で暮らせる社会を作ること」ではないだろうか。今回のエチオピア研修を通して、「Are you happy?」と多くの人に聞いた。エチオピアの人々の「YES!」という答えを聞く度に、自分のクラスでは何人の子が「YES!」と答えることができるだろうと考えさせられた。教育の課題や置かれている状況は、国によって様々である。日本では、不登校やいじめ、児童虐待などの報道をよく見かける。エチオピアでは、教材教具が十分であるとは言えない状況の中で教育活動を行っている。教育の重要性が認識されていないために、学校に通っていない子どもがたくさんいる地域もあった。しかし、どこの国でも教育を受けること、安心して学校に通えることはすごく大切なことだと強く感じた。そうした環境が整っていくことで、子どもたちの夢や想いが明るい未来へと繋がっていくと思う。

● 木下 恵

地球温暖化に伴い、CO2削減は地球規模で考えるべき大きな問題である。とはいえ、先進国が今まで大量のCO2を排出して発展してきたのに、これから発展を目指す途上国に規制をするのは不公平である。環境に配慮しつつ、発展を遂げるための支援を続けていく必要がある。そこで自然保護を目的としながら、現地の農家の収入を助けるという森林コーヒーのプロジェクトはとても興味深かった。CO2削減のために、これ以上森林を減らさないようにすることは大切ではあるが、成果の見えにくい、長期的な取り組みに賛同してくれるようにするには、現地の暮らしのことも同時に考えていかなければならない。そこで、森林で育ったコーヒーに付加価値を付けたり、販売する仕組みを整えたりして、農家の生活を向上させることも一緒に進めているらしい。このように、共通の課題に対して、互いにWin-Winになるようなアプローチの仕方を考えていくことが、共に考え越えていくということなのだと感じた。

● 近藤 勝士

今回の研修を通して、幸せとは何かということを深く考えさせられた。私自身、「幸せですか?」と聞かれたら、迷わず幸せだと答える。何故なら、日本という恵まれた環境に身を置き、物質的にも恵まれ、何より毎日子どもたちを前に授業ができるからだ。エチオピアの人々も「幸せですか?」という問いに対して、多くの人が幸せと答える。物質的には決して恵まれているわけではないのが、大切な家族や友達がいるからだという理由だ。やはり、人と人との繋がりが大切だと感じる。また、人それぞれ幸せの感じ方は違う。決して正解はないという視点で支援の仕方などを考える必要があると思う。押し付けやお節介にならないように、お互いのニーズや本当に必要なかを考えながら支援をしていかななくてはならない。世界の国々がお互いの文化や誇りは尊重し、お互いの良いところを学び合い、共によりよく幸せになっていくことを真剣に考えながら、行動していくことが大切であると強く感じた。

● 佐藤 仁美

共通の課題として特に印象に残ったのは、女性の社会進出の低さと、男尊女卑の考え方がまだある点である。エチオピアの特に田舎では、女の子は早くに結婚をしてしまうので、中学校や高校に通うことができず、社会進出の可能性が狭まってしまおうそう。また、結婚をしたら炊事洗濯などの家事全般は全て女性の仕事である。一方日本は、共働きが増えたとはいえ、管理職に就く女性の数は未だ低く、育児や家事は女性がすることが当たり前という感覚が根強いように感じる。現地のNGOスタッフのアシャナフィさんから、最近では“Women's Empowerment”ではなく、“Family Empowerment”という言葉を使い、家族みんなで一緒にこの問題に取り組んでいると聞いた。家族全員が働きやすく、生きやすい環境作りをすることが、国の更なる発展に必要なと思った。また、日本もエチオピアも、食料を始め、様々なものを輸入して成り立っている国である。困ったときはお互いさまで、お互いに助け合うべきだと強く感じた。

● 鈴木 翔大

エチオピアでの滞りで一番衝撃を受けたのが、水の利用についてである。ボンガという村に滞したとき、村全体が断水していた。ホテルでは、当然シャワーを使うことができなかった。トイレの水ですら流すことができない状態であった。その代わりに、断水した時のために貯めてあった水を使った。もしものときのためにエチオピアの人は水を大切にしているし、そのための備えもしっかりしているようなので大きな混乱にはなっていない。私自身、日本では水に困ったことがなかったのに、このとき水の大切さを身をもって体験させられた。ここで、ふと立ち止まって考えてみると日本でもダムの貯水量が少なくなってくると節水と呼ばれかけることがある。このときどれだけの人が本当に節水しているのだろうか。日本ではいくら安全な水に容易にアクセスすることがどこでも可能だとはいえ、水を無駄遣いするわけにはいかない。そう考えたとき、「水を大切にする」ということは両国の共通の課

題ではないかと感じた。

● 松田 真紀

日本の民間企業で進められているカイゼン5Sであるが、これまで転勤してきた学校現場では、何がどこにあるかわからないということが多かった。結局見つけられずに新しく購入して後に見つかり、無駄遣いであった。学校現場にこそ、私たちこそ、毎日を振り返り5Sを実践する必要性を感じる。少し工夫するだけで、効率も上がり、生産性も高まり、質の向上にもつながることは、どこの国でも共通事項である。また、大人を変えるのと同時に子どもも変えていく手立ての必要性も同様である。幼い頃からの習慣やしつけなど、教育に期待される分野も多い。かつての日本、60年代から80年代にかけて経済成長した姿の良い面をエチオピアは真似してほしいが、ゴミや公害という負の側面についても、手を打つのが遅れた日本から同時に学んでほしいと思う。安全な水の確保、付加価値を付けた輸出品、理数科教育、カイゼン導入、職業訓練支援など、多様なジャンルで実務的側面を求められている日本だが、相手を知りニーズを考え、共に取り組み共に目指す気持ちがよりよい関係を気付くのだと実感した。

● 油科 里佳

私はエチオピアでともに目標をもち、課題解決に向けて文化の壁を乗り越えて交流することの素晴らしさを学んだ。私が出会ったJICAの専門家、青年海外協力隊の皆さんに共通していたのは、一緒に歩もうとする姿勢だ。確かに日本は技術力も高く、歴史上の背景から様々な事柄に対するノウハウも持っている。彼らはおごることなく、彼らに寄り添い、彼らの文化に自分たちの文化を少しミックスさせる形での支援を行っていた。これはどんな課題に対しても言えることだろう。上下など存在しない。正解なんてないのだ。互いに自分の中で揺るがないポリシーをもつことはとても大切である。また、お互いを尊重し合い、目標こそ違えど、同じ方向に向かって歩んでいく柔軟な姿勢こそ、世界共通の課題解決には必要だと考えた。

● 吉田 麻里子

日本とエチオピアの共通の大きな課題は、「教育」ではないかと思う。両国の課題である女性の社会進出や環境保護の問題など、いろんな側面からその解決法を考えていくと、必ず「教育の充実」ということにつながる。しかし、共通の課題はあっても、国の状況は大きく異なる。互いの国の状況や価値観を受け入れながら解決していかなければならない。今回の研修を通して、「JICAの行っている持続可能な支援の在り方」と、「教育」とは非常に似ていることに気付いた。教育は、持続可能でありたい。学校で教わったことなどを自分なりに考えて、未来を自分でつくれるような子どもたちをつくりたい。子どもたちが大人になった時に、世界が幸せであるように、そんな視点をもった大人になれるように、まずこれから目の前の子どもたちに真剣に向かっていきたいと思う。教育のもつ力とその可能性の大きさを感じた研修だった。

● ハンズオン教材「エチオピアBOX」

◇ 手にとって感じることでできるエチオピアならではのものを集めた「エチオピアBOX」を共同で作成した。このBOXには、現地での使用方法を撮影した写真も入れた。

※1ブル=約5円

No.	タイトル	説明	数量	価格※ (ブル)	説明写真
1	民族衣装 (成人女性)	エチオピアの女性の民族衣装「アベシャ リブス(エチオピアの服)」。ワンピースで刺繍を施している。首にスカーフをまとうことが多い。	1着	400	⑥
2	スカーフ	民族衣装のワンピースにまとうスカーフ。	1着	200	⑥
3	民族衣装 (成人男性)	エチオピアの男性の民族衣装「アベシャ リブス」。大きなシャツで白を基調とし刺繍を施している。白い木綿のショールをまとうことが多い。	1着	200	
4	民族衣装 (女の子)	子ども用の民族衣装「アベシャ リブス」。ワンピースで刺繍を施している。「ナタラ」と呼ぶショールとのセット。	1着	250	
5	コーヒーセレモニー ポット	エチオピアの伝統的な習慣で、コーヒーを飲むことを儀式化した作法の一つであるコーヒーセレモニーに使用するポット。	1個	50	⑪
6	コーヒーセレモニー 炉	コーヒーセレモニーに使用するポットを乗せて沸かし暖めるための炉(燃料は炭)。	1個	25	⑪
7	コーヒー豆入れ	コーヒーセレモニーの際、煎った前を入れて、冷ましつつ香りを楽しむための豆入れ。	1個	40	⑪
8	コーヒー豆	茶色の豆「ドライチェリー」…天日乾燥した状態の果実。白色の豆…水洗いして果肉を取り除いた豆。緑色の豆…茶色の豆あるいは白色の豆から薄皮をむいた生豆。	70粒	—	⑫
9	カップ&ソーサー	コーヒーセレモニーで提供するエチオピアのアートが描かれたコーヒーカップとソーサーのセット。	6客	450	⑪
10	なべしき	エチオピアの一般家庭で使われているなべしき。	1枚	10	
11	ほうき	エチオピアの一般家庭で使われているほうき。	1本	15	
12	カゴ	エチオピアの一般家庭で使われているカゴ。	1個	55	
13	楽器1	エチオピアのハーブ「クラル」の民芸品楽器。	1個	100	⑩
14	楽器2	エチオピアの太鼓の民芸品楽器。	1個	100	
15	十字架	エチオピアで独自に発展したキリスト教であるエチオピア正教の十字架	1本	100	
16	教会の聖書・ 書籍・CD	エチオピア正教のホーリー・トリニティ大聖堂で購入した聖書、書籍、CD。	2冊 1枚	50	⑬
17	教会用キャンドル	エチオピア正教のホーリー・トリニティ大聖堂で使用しているものと同じキャンドル。	1本	2	⑬
18	教会用お香	エチオピア正教のホーリー・トリニティ大聖堂で使用しているものと同じお香。	1袋	10	⑬
19	名刺入れ	エチオピアン・ハイランド・レザーで出来た名刺入れ。JICAと協力してブランド化をめざしている商品。説明書付き。	1個 1枚	100	
20	ポストカード	女性の職業訓練を支援するためのチャリティーカード。バナナ・リーフが材料。15ブルのうち8ブルが女性の収入となる。	1枚	15	
21	学校での 子どものメモ	小学生が算数の授業の際、メモしたと思われる用紙。	1枚	—	
22	辞書	翻訳辞書	1冊	—	
23	ボンガ観光 パンフレット	観光による町おこしのためボンガ市役所観光課が作成したもの。青年海外協力隊が作成を支援した。	3冊	—	③
24	紙幣・通貨	エチオピアの紙幣…100ブル、50ブル、10ブル、5ブル。 エチオピアの硬貨…1ブル、25サンチュム	4枚 2枚	166.25	
25	エチオピア国旗	民芸品屋で売っていた簡易はエチオピア国旗。	1旗	50	
26	新聞紙	ホテルでもらったエチオピアの日刊紙「Fortune」と、2面にJICA教師海外研修の記事が載った「The Daily Monitor」	2紙	—	
27	解説カード	エチオピアBOXの解説カード	26枚	—	
28	写真集	エチオピアを表す20枚の写真集	20枚	—	

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

<現地研修の報告>

- ◇ 同行ファシリテーターの挨拶の後、エチオピアチームが ①エチオピアの挨拶、②エチオピア基本情報、③食文化、④水事情、⑤学校の様子、⑥青年海外協力隊・専門家の活躍について現地の写真とともに紹介し、支援の在り方と現地研修を通して学んだことを、現地研修で日々行っていたふりかえりワークショップを再現する形で発表した。

● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム2017での報告

<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラムに参加した人たちに、56分間（14分×4セッション）報告を行った。



<分科会ワークショップ>

- ◇ 現地での発見、気づき、学びを基に、参加者に伝えたいことや共に考えたいことをテーマにワークショップ・プログラムを作り、分科会にて提供した。

タイトル「同じと違いから考える人権」

テーマ： 多様性

ねらい： ・多様性の大切さを理解する。

(多様性受容力を高める)

・エチオピアを通して、人権について理解する。



<教師海外研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーターによるチーム紹介後、次の流れで海外研修報告を行った。

- ① エチオピアの特徴的な挨拶と基本情報を紹介
- ② 現地研修で日々行っていたふりかえりワークショップを再現する形で、研修内容を報告
- ③ 印象に残っている出来事を写真と共に紹介

- ◇ 会場内に「エチオピア展示コーナー」を設け、生活用品や現地の学校で使われている教科書などの紹介を行った。

